

日本旧石器学会

ニュースレター 第19号

NEWS LETTER No.19

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

Dual Symposia
Symposium on
the Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Palaeolithic Asia
&
The 4th Annual Meeting of the Asia Palaeolithic Association (APA)
参加報告



鈴木美保 (第4回 APA 日本大会実行委員会)

2011年11月26日～12月1日の6日間上野の国立科学博物館にて上記シンポジウムが開催された。当初予定では6月25日、主催団体である日本旧石器学会の年次総会を幕開けに開催される予定であったが、東日本大震災とそれによる福島第一原発の事故の影響を受けてちょうど5ヶ月延期での開催となった。

今回シンポジウムの2本の柱の内のひとつであるAPAの年次総会は2008年に第1回大会がロシアで開催され、中国、韓国と続き、第4回目の今回が初めての日本大会である。筆者は事務局としてその準備段階からこのシンポジウムと深くかわらせていただいたので、参加者、主催者の両視点から今回のシンポジウムを振り返り報告させていただきます。

全日程は以下の通りである。

11月26日(土) 受付・一般講演・歓迎会
27日(日) APA年次大会(口頭・ポスター)
APA役員会

28日(月) 巡検(沼津市文化財センター)
29日(火) シンポ1日目(口頭・ポスター)
30日(水) シンポ2日目(口頭)

12月1日(木) シンポ3日目(口頭)・お別れ会

1日目

受付の開始は11月26日の午前中からだったが、24日には今回のキーノートスピーカーの一人であり、一般講演もお願いするイギリスのポー

ル・メラーズが来日、翌25日には早朝から外国人の招待講演者が続々と到着。実行委員ほかアルバイト学生が入れ替わり立ち替わり成田にスタンバイして到着する招待講演者たちをピックアップしては上野のホテルまで案内、同時に科学博物館では会場設営や受付の最終確認など本格的な準備が進められていて、前日にはすっかりシンポジウムモードに突入していた。

26日、受付開始、最初の登録者のあまりにも早い到着に準備もそこそこにシンポジウムが始まってしまっていた。最初こそバタバタしたものの、受付は予想したほどの大きな混乱もなく予定通り午後1時30分に講演が開始された。

ポール・メラーズ「現代人的行動の起源：考古学的証拠と行動学的解釈」

ミハイル・V・シュニコフ「人類の起源とユーラシア大陸における人類居住 - 解剖学的現代人の形成」



写真1 一般講演

上記2つのテーマの講演は今回のシンポジウムでは唯一、日本語通訳のつく発表であった。定員120名の日本人向けの登録制にしていたが、実際には海外参加者や申し込みをしていない関係者も聴講していたので会場は満員、150名は会場にいたのではないと思われる。

各80分という長時間の講演であったにもかかわらず、どちらの発表もスライドがきれいで通訳もとてもわかりやすく、時間を感じさせられなかった。また、両発表は今回のシンポジウムを通じて、一貫して議論となってきた現代人の起源と文化の起源の問題に対して異なる主張に立つ発表であったので、2日目以降の議論の入り口として大変興味深いものであったと思う。一般の聴講者がこの2つの異なる主張をどのように受け止めたかも大いに気になるところで、個人的にはアンケートなど試してみてもよかったかな、と思っている。

一般講演の後は歓迎パーティーが催された。科学博物館の地球館地下2階人類進化の展示ホールにてである。展示室でパーティーが開かれるのは地球館のオープニングセレモニー以来2度目のことだそうで、当たり前ともいえるが、普通はめったに許可が下りないのだそうである。お料理とお酒があつという間になくなってしまい、主催者側としては大いにあせってしまったが、展示ホールの厳かな雰囲気をみんなが楽しんでいる様子がよく伝わってきたし、また今回のシンポジウムテーマとも深く関わりのある展示ホールをゆっくりと見学してもらう良い機会にもなっただろう、ということでもとりにあえず大目に見てもらうことにした。

2日目

APAの年次大会、いよいよ本格的なシンポジウムの始まりである。日本旧石器学会の小野昭会長、アジア旧石器協会の李隆助会長の挨拶から始まり、4つのセッションに分かれた、14本の口頭発表が続いた。各セッションは以下の通りである。

セッションⅠ：アジア旧石器の文化的多様性

セッションⅡ：行動戦略と石器技術

セッションⅢ：古環境および古人類学的研究

セッションⅣ：現代人の出現と多様性

日本、中国、ロシアの発表が4本ずつと韓国、その他の国の発表が1本ずつであった。

発表の内容は多種多様ではあったが、石器の使

用痕分析を中心とする発表を含めセッションⅡの発表が6本と多かったのは、後半のシンポジウムのテーマを意識してだったのか。また、東アジアの旧石器時代に関する発表に対しポール・メラーズをはじめとする欧米やオーストラリアの研究者が積極的にコメントや質問を投げかけ、討論では司会が入り込む余地がないほどの激しい応酬も見られた。

昼食休憩の時間にはポスターセッションのコアタイムと特別展示の見学が平行して行われた。APAに登録されたポスターセッションは26本あったが、当日は25本のポスターが掲示された。

ポスター・展示会場はあまり広い部屋ではなかったため、混雑を避けるために見学時間を前半と後半に分けて一度に見学する人数を調整した。

特別展示は今回のシンポジウムテーマと関わる後期旧石器時代前半期(EUP)に焦点を当て、石斧、台形様石器、環状ブロックに関するポスター発表が解説の一助となるように配置し、武蔵台遺跡(府中市)、野水遺跡(調布市)、西台後藤田遺跡(板橋区)の資料を、また、関東ローム層を基準にした層位的な石器の編年が概観できるよう大門遺跡(板橋区)や天文台遺跡(三鷹市)資料を展示した。展示資料のうち石斧関連資料など大きな資料は基本的にオープンにして、研究者にじかに手にとって観察してもらえるようにしたため事故の起きないよう多くの人を配置しなければならなかったため、シンポジウムに参加登録をしている日本人の参加者の方々にお手伝いをお願いした。突然のお願いにもかかわらず、多くの方々のご協力を得ることができた。お手伝いの方々には単に資料の見守りだけではなく、適宜質問や解説にも対応してもらったことで、展示資料を通じて列島の旧石器



写真2 展示資料を観察するオーストラリア研究者

時代についてより深く理解してもらえればという思いであった。

参加研究者は考古学者だけではなくだったので、資料を見学する様子は様々であったが、局部磨製石斧については熱心に手にとって見学する研究者の姿が見られ、特に同年代に位置づけられる局部磨製石斧を発掘調査しているオーストラリアのルー・オコーナーやピーター・ヒスコックなどは熱心に観察、質問する姿が見られた。

3 日目

沼津への巡検の日である。お天気、渋滞、様々な事故、心配事の最も多くあったイベントである。参加予定者は 85 名、手配した 2 台の大型バスはほぼ満席状態であった。渋滞を回避するため集合時間は 7 時、幸い遅れる人は一人もいなかった。配車もスムーズに行き、予定通り 15 分には出発することができた。

空模様は曇りで比較的厚い雲が出ていたので富士山はあきらめるしかないだろう、雨が降らなかったことに感謝しようと思っていた。比較的順調に東名を走っていくと、曇り空なのになんと頭に雪を抱いた富士山をくっきりと見ることができたのである。

外国人の方々はバスの中で富士山の姿に歓声をあげてくれたが、富士山が見えて一番喜んだのは



写真3 エクスカーション

我々スタッフだったかもしれない。

予定時間よりも 30 分ほど早く愛鷹運動公園に到着したが、これも予定の内ですでに沼津市側のスタッフの方々は万全の体制でスタンバイしてくださっていた。ここでは、この日のために掘削したトレンチで厚い基本層序を見学してもらい、また、小さな沢に下りて遺跡が立地する景観を体験してもらった。トレンチでは旧石器時代の陥し穴がどのような状態で出土したかがわかるよう大きく引き伸ばした写真等を駆使してわかりやすく解説してもらった。運動公園での見学が終わると、沼津市文化財センターへ移動、用意していただいた軽い昼食をとり、バスごとに資料見学とレクチャー、ここでの主要テーマも EUP、陥し穴と局部磨製石斧、台形様石器に海を渡った黒曜石である。資料見学もレクチャーも準備が行き届いていて、わかりやすいように様々な工夫がされていた。2 時間あまりで文化財センターを後にすると港湾に向かい、水門展望台びゅうおに登り、海側から愛鷹丘陵の地形と富士山を見学、午後 3 時半には港湾でディナーとなった。新鮮でおいしい魚料理や日本酒は外国人参加者にも大好評であった。

帰りのバスも大きな渋滞はなく、渋滞回避のために湾岸線に行くことで、横浜の夜景のおまけつきでほぼ予定通りに上野に到着した。各バスで通訳をお願いしていた門脇誠二さん、佐野勝宏さん準備から当日の対応まで大変なご苦労をおかけした池谷信之さんをはじめとする沼津市文化財センターの方々、また、日本人の参加者の方々にも終始スムーズに進むよう協力していただけただけのために予想以上に実りのある巡検になった。

4 日目～6 日目

今回のシンポジウムの 2 本目の柱、シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」(MHB シンポ)の始まりである。昨日の巡検の興奮も覚めやらぬ中での後半戦への突入という感じだった。

国立科学博物館の近藤信司館長の挨拶に始まり、組織委員の海部陽介さんによる趣旨説明、ポール・メラーズ、スヴォボダ、テッド・ゲーベルという 3 人の欧米研究者によるキーノートスピーチが続いた。

その後の構成は以下の通りである。

セッションⅠ：拡散と移動：化石形態学・遺伝学的証拠

ポスターセッションコアタイム（4日目）

セッションⅡ：北・東アジアの現代人的行動
（5日目）

セッションⅢ：南・東南アジアの現代人的行動
（6日目）

セッションⅠでは、形質人類学、遺伝学から7本の発表があり（1本は発表者の都合で6日目に発表）、セッションⅡ・Ⅲでは各地域の環境復元に関する発表も含まれていたが、多くは考古学者による文化的復元を中心とする発表であった。シンポジウム全体を通じてどの発表にも積極的な質問やコメントが投げかけられたが、セッションⅡの日本人研究者の発表には、展示や巡検で予備知識を蓄えていた海外研究者たちから一段と多くの質問やコメントが向けられているように感じられた。

各セッションの最後、1日の終わりには討論の時間が設けられていて、特に最終日にはピーター・ベルウッドによる総括があり、最終討論が行われた。参加者の方々は疲れも見せず、最後まで会場の席の多くは埋った状態で、熱い討論が繰り広げられた。

シンポジウム直前に招待講演者の体調不良によるキャンセルもあり、代読という残念な発表もあったが総計で40本の口頭発表、15本のポスター発表が行われた。

会議終了後博物館のレストランむせいおんにてさよならパーティーが催された。6日間の会期を一緒に過ごしてきたなかで、研究者同士がかなり打ち解けた様子で、巡検の後の懇親会とはまた違って静かに盛り上がっている感じで、みな名残を惜んでいるかのように見えたのは私だけだったろうか。総計で187名、内外国人59名の参加者を迎えたシンポジウムのすべての日程がこのパーティーで終了した。

駆け足で6日間の報告を行ってきた。最初は発表内容についてももう少し深く紹介しようと考えていたが、改めてプログラムを見なおすと実のところじっくりと聞くことのできた発表はほとんどなく、膨大な内容にとっても踏み込めそうもないことに気がついた。今後今回のシンポジウムの記録集が出版される予定なので、内容の詳細については、

是非そちらを見ていただきたいと思います。

20年以上前、イブ仮説が提示されたころ論争になっていた単一起源説と多地域進化説、イブ仮説は今では教科書に掲載されるようになり、一度はその論争には決着がついたように見えたが、そのプロセスはそれほど単純ではないことは今では明らかである。

人類の拡散や移動について語るには世界中の遺跡から出土している証拠が必要である。これまでのところ情報としての質や量で勝るヨーロッパ地域の証拠を重視せざるを得ない状況もあったが、アジア地域の証拠が必ずしも劣っているわけではないことはいまや明らかである。シンポジウムを振り返って、アジア地域の研究の現状について、世界、特に欧米の研究者に知ってもらおうという今回のシンポジウムの大きな目標を十分に果たすことができたのではないかと感じている。

それは、巡検や日本人研究者の発表に対する参加者の反応や読売新聞の記事になった「40年いろんな学会に参加してきたが、今回最も新しい情報を得ることができた。」というポール・メラーズの感想にも現れているのではないだろうか。今回のシンポジウムは日本で初めてのAPA年次大会を兼ねていたが、今後の国際的な研究交流の足がかりの一步になったとしたら実行委員の一員として大変光栄に思う次第である。

最後になりましたが、今回のシンポジウムが最後まで滞りなく遂行できたのは、関係者一人ひとりがみな自分の役割を誠心誠意努めてくれたことに尽きると思っています。会の運営にご協力いただいた方々、参加して盛り上げて下さった方々、支えてくれたすべての方々にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。



写真4 最終日記念撮影

施設紹介

遠軽町埋蔵文化財センター

平成 23 年 7 月 8 日に遠軽町埋蔵文化財センターが遠軽町役場白滝総合支所の 2 階にオープンした。

遠軽町は北海道オホーツク支庁管内中西部に位置し、平成 17 年 10 月に 3 町 1 村（遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村）が合併し現在に至る。

町内には国内最大級の黒曜石原産地「赤石山」を中心に湧別川の河岸段丘上に国指定史跡「白滝遺跡群」など後期旧石器時代の遺跡が数多く所在することで知られる。平成 7～20 年には高規格道路建設工事に伴い、北海道埋蔵文化財センター、白滝村教育委員会（当時）により 14 ヘクタールに及ぶ発掘調査が実施される。その結果、旧石器時代を主体とする 20 遺跡から遺物総数 767 万点、総重量約 13 トンもの遺物が出土した。

さらに所有する資料には、重要文化財「北海道白滝遺跡群出土品」（服部台 2・奥白滝 1・上白滝 2・上白滝 5・上白滝 7・上白滝 8 遺跡：石器 1,423 点、接合資料 435 組、合計 1,858 点）や北海道指定有形文化財「幌加川遺跡出土の石器群」など重要な旧石器資料が多い。しかし、展示・収蔵する施設が老朽化・狭隘化しており、その改善は喫緊の課題となっていた。

このため、合併により一部が未使用だった白滝総合支所（旧白滝村役場）内に埋蔵文化財センターの設置を検討。平成 21・22 年度に文化庁の補助を受けて改修工事を実施し、黒曜石製旧石器資料を中心とした展示、収蔵、活用の拠点施設に生まれ変わった。施設は展示ゾーン 670 ㎡、体験学習ゾーン 780 ㎡、収蔵ゾーン 160 ㎡の計 1,610 ㎡である。

展示ゾーン（図 1）は町内の代表的な遺跡を紹介する「大地に遺された記憶」、赤石山と白滝遺跡群を解説した「現れた大遺跡群」、旧石器時代の石器の製作方法を解説した「白滝での石器づくり」（写真 2）、氷河期の生活の様子を紹介する「旧石器時代の暮らし」、地元の考古学研究者・遠間栄治氏の功績を紹介した「遠間栄治記念室」、重要文化財を展示する「黒曜石ギャラリー」（写真 1）など 6 つのテーマで構成している。特に黒曜石ギャラリーでは黒曜石製の石器や接合資料約 1,000 点展示しており、原石の搬入や素材・石器の搬出、剥片剥離技術や各種石器の製作工程など原産地遺跡の規模の大きさを実感することができる。

体験学習ゾーンでは 50 名程度まで収容可能な体験学習室を整備。黒曜石での石器づくりのほか、滑石での勾玉づくり、黒曜石や鹿角でのアクセサリづくりなど各種体験学習を行うことができる（有料）。

平成 24 年度には白滝ジオパーク交流センターが併設される。白滝ジオパークは平成 22 年に日本ジオパーク委員会の認定により日本ジオパークネットワークの正会員となった。今後は黒曜石原産地を中心とした白滝ジオパークの活動とも連携し、地質学、考古学の両面から教育・観光活動への活用が期待できる。

（遠軽町埋蔵文化財センター 松村倫文）

遠軽町埋蔵文化財センター

〒 099-0111 北海道紋別郡遠軽町白滝 138-1

TEL 0158-48-2213 FAX 0158-48-2374

<http://engaru.jp/geo/>

開館時間 9:00～17:00

休館日 5～10月まで無休。11～4月は土・日曜、祝日、

年末年始

展示室入館料 一般 300 円 高校以下 150 円

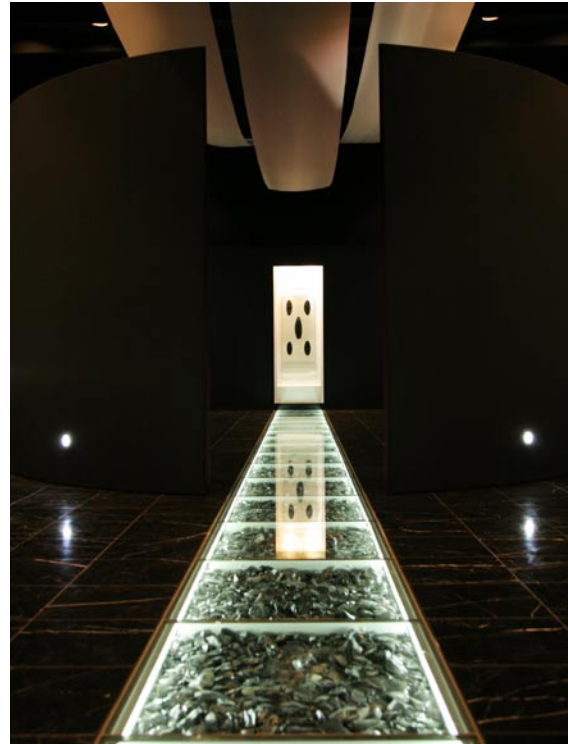


写真 1 黒曜石ギャラリー



写真 2 「白滝での石器づくり」ゾーン

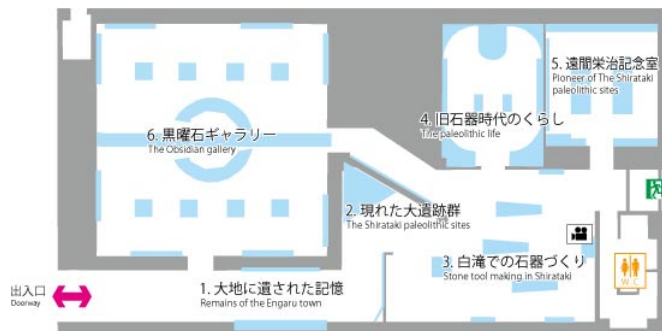


図 1 展示ゾーン

役員選挙のお知らせ

2011年12月3日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 藤波啓容

日本旧石器学会の役員選挙告示

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2012年2月3日（金）までに日本旧石器学会選挙管理委員会（〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館内 日本旧石器学会事務局）に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は100字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2012年2月中旬に発送します。

3. 投票期間

2012年3月1日（木）～3月20日（火）

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位22位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州7地区の上位得票者から役員1名を選出し、他15名を上位得票者数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員22名は全員改選の対象になります。以下の会員を除く全会員に被選挙権があります。被選挙権がない会員は、出穂雅実、加藤勝仁、亀田直美、小菅将夫、島田和高、鈴木次郎、鈴木美保、西井幸雄、野口 淳、光石鳴巳、宮田栄二、山原敏朗です。

2011年12月3日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 藤波啓容

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の原稿作成について（依頼）

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿については、下記により作成方をお願い致します。

記

1. 原稿作成方法

A4版横書きのペン書き、またはワープロ原稿（A4、10.5ポイント、横書き、ワード他）。なお、ペン書きの原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補

①候補者名、②推薦内容、③推薦者氏名

2. 立候補

①立候補者名、②自薦内容

②の内容は100字以内でお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまたは押印が必要です。また、立候補の場合は電子メールに添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切

2012年2月3日（金）

送付先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学博物館内 日本旧石器学会事務局

島田和高

電子メールアドレス shimameiji@hotmail.co.jp

日本旧石器学会役員選挙日程（案）

2011年

12月 選挙告示

2012年

2月3日（金）立候補・候補者推薦の締め切り

2月中旬 選挙公報及び投票用紙送付

3月1日（木）～3月20日（火）選挙期間（3月20日消印まで有効）

3月 選挙管理委員会による開票

5月 ニュースレターにて選挙結果報告

6月 総会にて選挙管理委員長報告

2012年度日本旧石器学会総会・研究発表・シンポジウムのご案内（第一報）

第10回総会・研究発表・シンポジウム

会場：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂他

（近鉄「大和西大寺」駅下車徒歩15分）

<http://www.nabunken.go.jp/heiho/museum/index.html>

日時：2012年6月23日（土）～24日（日）

6月23日（土）

総会（13:00～14:00）、記念講演（14:15～15:15）、
一般研究発表（15:30～16:30）、シンポジウム（16:35～17:30）、懇親会

6月24日（日）

シンポジウム（9:00～15:30）

※ポスター発表コアタイム（12:00～13:00）

総会・記念講演・一般研究発表・シンポジウムの時間は予定です。変更になる可能性があります。シンポジウムは「日本の旧石器時代遺跡」データベースの活用に関連するテーマで開催する予定です。一般研究発表・ポスター発表の募集を含め、詳細は決まり次第、順次、日本旧石器学会ホームページでご案内いたします。日程・プログラムの詳細（確定案）、参加申し込みについては、ニュースレター第20号に第二報として掲載する予定です。

2011 年度委員会中間報告

総務委員会 総務委員会では、先の総会（6月25日開催）において承認された日本旧石器学会研究グループ内規にもとづき、2011年度研究グループの公募を行った。公募の告示は学会ホームページに掲載した。その結果、「沖縄更新世人類研究グループ」（研究代表者：山崎真治）から応募があった。応募件数は1件であった。申請内容にもとづく役員会審議の結果、当該研究グループの設置および運営費の交付を承認した。当該研究グループの研究計画等概要については学会ホームページに掲載した。また、APA（アジア旧石器協会）日本大会実行委員として総務委員も参画し、11月26日～12月1日に開催されたAPAおよびシンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」の準備・運営にあたった。また、7月以降、事務局では5名の入会申し込みを受け、入会審査委員会による審査にもとづき入会手続きを行った。なお、今年度は次年度役員選挙があることから、選挙管理委員会とともに告示発送などの選挙事務を行った。

研究企画委員会 委員7名（兼務1名、委嘱4名）に体制を拡充し、2012年度総会・研究発表・シンポジウムの開催準備を進めている。詳細については、実行委員会およびデータベース委員会・総務委員会と調整の上、検討を進めている。開催案内（第一報）については、ニュースレター本号に掲載したとおりである。引き続き、一般研究発表・ポスター発表の募集、シンポジウムのプログラムについて検討した上で、順次ホームページ上で周知するとともに、ニュースレター次号に詳細（第二報）を掲載する予定である。

会誌委員会 2011年6月以降、メール会議および東京近郊在住の委員による打合せを適宜おこない、以下の3点について作業を継続的に実施・検討している。（1）第8号の刊行に向けた連絡・編集作業、（2）会誌編集委員会活動項目の整理とマニュアル化、および（3）改定を視野に入れた投稿規定の検討。（1）については、8月に刊行されたニュースレター第18号において会員に原稿の募集について周知し、その後、投稿原稿の受付をおこなっている。（2）については、編集委員の負担軽減を図りつつ、原稿投稿から掲載までのよりスムーズな連絡・編集作業を確立するためにマニュアルを作成している。（3）については（2）を踏まえ、今日の学会誌の趨勢や実情に合わない点を抽出する作業に着手した。

ニュースレター委員会 第18号、第19号の編集・発行を行った。主な内容は下表のとおり。

第18号 第9回日本旧石器学会の開催（報告）、Characteristic features of the Middle to Upper Paleolithic transition in Eurasia: development of culture and evolution of Homo species（ロシアアルタイで行われた国際シンポジウム報告）、2010年度委員会報告、2011年度活動計画、日本旧石器学会研究グループ内規について、2011年度役員会（役員紹介）、関連学会情報（九州旧石器文化研究会、中・四国旧石器文化談話会、信州黒曜石フォーラム）、おし

らせ

第19号 本紙

渉外委員会 11月に延期された下記シンポジウムに関する渉外・連絡・調整・準備を行い、無事開催することができた。詳細は、本号掲載の鈴木事務局長の報告を参照されたい。大会実行委員および関係者のご助力・ご援助に深謝したい。

Dual Symposia: The Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia & The 4th Annual Meeting of the Asian Palaeolithic Association (APA)

主催：日本旧石器学会・国立科学博物館

開催期間：2011年11月26日（土）～12月1日（木）

また、シンポジウム開催期間中にAPA執行委員会を開催し、次回の大会は2012年7月前半に、ロシア・クラスノヤルスク市で開催することに決定した。

第37回九州旧石器文化研究会

「九州地方における三稜尖頭器の製作技術と石器石材について」開催報告

川道 寛氏を新会長とする九州旧石器文化研究会は、別府大学の協力のもと別府大学附属博物館を会場とし、別府大学史学研究会との共催によって2011年10月1日（土）・2日（日）の2日間に渡り、第37回九州旧石器文化研究会大分大会を開催した。

本大会では、「九州地方における三稜尖頭器の製作技術と石器石材について」をテーマとし、下記の講演、九州各地域の研究発表、討論等が行われた。

2011年10月1日（土）13:00～17:00

開会行事・趣旨説明

講演「九州・沖縄地方の旧石器考古学に関係するテフラ研究の現状と課題—南九州を中心に—」早田勉、「関東地方の角錐状石器の製作技術」亀田直美

研究発表「石材ごとの製作技術①」「祖母・傾山系産流紋岩製角錐状石器の製作技術」宮田剛、「宮崎平野部における角錐状石器の製作技術について—頁岩・ホルンフェルス製の接合資料を中心として—」秋成雅博

資料見学会（宮崎県船野遺跡出土遺物、関東地方の角錐状石器）、懇親会

2011年10月2日（日）9:15～13:00

研究発表「石材ごとの製作技術②」、「南九州における角錐状石器の製作技術について」馬籠亮道、「中九州における角錐状石器の製作技術について—チャート・小国産黒曜石を中心として—」越知睦和、「西北九州の黒曜石製角錐状石器」杉原敏之

討論、資料見学会

参加者は、九州内はもとより中国・四国・近畿・関東と幅広く最終的には延べ約100人を超えた。

初日に行われた早田氏による講演では、テフラ・カタログの刊行により、火山灰編年学の利用が第四紀研究を特徴付ける方法として高い評価が得られるものの、噴出年代やテフラ・カタログに収録されていないテフラの検出、また、テフラの同定結果にも問題のある報告が散見される等、検

討すべき課題が多くあるとし、九州・沖縄地方での旧石器研究に関係するテフラの現状と課題を紹介した。

亀田氏は、武蔵野台地における、いわゆる「V層・IV下段階」の石器群が同時期の種々の側面を良好に示す石器として位置付けられるとし、分布、編年上の位置、形態上の特徴、石材、組成、変遷、製作技術等から関東の角錐状石器の様相を提示した。

研究発表は、九州各地域における石材ごとの製作技術の発表となった。

宮田氏は、良好な石材として大分県大野川流域や宮崎県五ヶ瀬川流域を中心にみられる祖母・傾山系流紋岩類を使用した角錐状石器をとりあげ、大分県駒方池迫遺跡、同県茶屋久保遺跡を中心に、角錐状石器の製作技術について触れた。

秋成氏は近年増加している宮崎県下の資料をもとに、県央～県南地域に主体をなす頁岩・ホルンフェルス製の角錐状石器の接合資料を集成し、当地域における製作技術やそれに係る生産から製品製作までの遺跡の在り方を予察した。

資料見学会では、宮崎県船野遺跡の資料のほか、亀田氏の計らいによって関東地方の角錐状石器も見学でき、充実した内容となった。

懇親会は、当研究会が用意した宿泊施設で行われた。発表者だけでなく、各地域の研究者の方々や共催機関である別府大学関係者等多くの方が参加し、研究会では話ききれない議論を交わし、熱い夜となった。

2日目は南・中・西北九州の発表が中心となった。

馬籠氏は、調整技術に関しては多くの先行研究があり、基本的な理解として定着しているため、石材によるサイズや素材利用の在り方の変異に着目した検討を行い、石材利用の特質を踏まえた地域的特徴の抽出を試みた。

越知氏は、中九州にみられる角錐状石器の主体をなす石材がチャートと小国産黒曜石であることを踏まえ、当地域の中心となる人吉・小国地方に焦点をあて、前者を中九州南部、後者を中九州北部と区分し、サイズ、加工の属性から分析を行った。

杉原氏は、西北九州域は大型サヌカイト製品が多久・小城地域の原産地と密接な関わりがあることが理解されているなかで、黒曜石製角錐状石器の動向については不明な点が多いとし、製作技術、型式変化と石材消費の視点から当地域における特徴を抽出した。

本大会の目的は、九州各地域の石器石材と三稜尖頭器の製作技術の具体的な関係を見出し、議論を深めていくことにあった。

石材、或いは九州各地域の三稜尖頭器に関係する様相が、新資料や接合資料、様々な視点で議論され、共通認識を図れたことについては当初の目標を達成できたといえる。

また、九州地方のみならず、関東・中部・近畿・中国・四国地方など多くの研究者によって他地域の当該期の様相にも触れることができ、多角的な視点から議論を深めることができたのは大きな収穫であったといえよう。

(沖野 誠)

特別講演会 開催のお知らせ 「ヨーロッパ旧石器時代の洞窟壁画」

ヨーロッパ旧石器時代では、著名なラスコーや近年ではショーヴェなど、すばらしい洞窟壁画が数多く存在します。後期旧石器人の描いた洞窟壁画研究が専門の東京藝術大学五十嵐ジャンヌさんの講演会です。

講師：東京藝術大学美術研究科リサーチセンター

五十嵐ジャンヌさん（フランス国立自然史博物館先史学博士）

日時：2012年2月26日（日）14：00—15：30

会場：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン9階
309E 教室 東京都千代田区神田駿河台1-1

参加：申込み不要。参加費不要。

共催：明治大学黒曜石研究センター

(担当：広報委員会)

会費納入のお願い

今年度は、春の総会時にシンポジウムを開催しなかったこともあり、総会の出席会員数が少なく、従って総会時の会費納入が少なかったという実績がありました。このため、11月末日時点での会費納入者数は170名（会員数247名）で77名の未納者を数えます。この数字は、例年のこの時期の未納者数（60名前後）に比べて多いといえます。

日本旧石器学会では、皆様ご承知のように、会費によって運営しているため、会費は原則前納とさせていただいております。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター

第19号

2012年1月10日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

谷 和隆・山原敏朗・沖 憲明

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和 high

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp

HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/index.htm>